

ニッコリース

南小生徒指導だより
No.10 2022.11.22

「弱い者いじめはやめよう！」

…って
いいのか？それで…。

～人を思いやる言葉や気持ちについての一考察～

「弱い者いじめはやめよう。」…あたりまえのことです。でもちょっと違和感…。

いじめをしないことについては、議論の余地などありません。でも、はじめの部分の「弱い者」という表現がどうも気になります。いじめられている当事者を「弱い者」と言い切るその人の中に傲慢さや優越性を感じてしまうのは自分だけでしょうか。すでにそこに、いじめられていない“安全圏”にいる側からの無意識な差別（いじめ）が存在しているのではないかと、というのは考えすぎでしょうか。（そういう意味では童謡「子鹿のバンビ」の歌詞の4番などはすさまじい。森の人気者、子鹿のバンビは成長して森のリーダーになるだろうという内容… ♪～子鹿のバンビはやさしいな 弱虫いじめ しないもの～♪ だって…。「弱虫いじめ」ですから…。仲間の一部を「弱虫」と決めつけて表現していること自体、すでにいじめ？潜在的な？）

「かわいそう」という言葉、これも優しさや思いやりを連想する言葉ですが、これにもちょっと抵抗があります。もちろんそのように他者をいたわり、同情する気持ちは大切だし、あるべき姿ですが、考えようによっては、「かわいそうな人」に比べて自分はそうではないんだ、やはり“安全圏”にいるという、いわゆる「上から目線」を感じてしまいます。また、何よりも相手を「かわいそう」と思うことで「…そう思っている自分は優しい心を持っている、…自分て素敵。」という自己満足に浸っている部分もあるのではないだろうか、と思ってしまう。

さらに言えば「かわいそう。」と言われた人たちは、そう言ってくれてありがたい、うれしい、と思うのでしょうか。両手足が不自由で車イスに乗って活動しているホーキング青山という芸人がいますが、この人がその著作「笑え！五体不満足」の中で、障がいのある人の側からの思いを吐露していましたが、同じような内容でした。（ちなみに「障害者」という表現も「障がいのある人」と「害」をひらがな表記にするなど、やわらかくなっています。）

言い出したら切りがなく、非常にデリケートな問題ですが、私たちはいろいろな場面で、自分ではそんなつもりで言ったのではないのに、（むしろよいことを言ったつもりなのに）知らないうちに相手を傷つけてしまっていることがあるかもしれない、いや、多々あるんだろうな…。

そんなことを考える今日この頃です。（あの時、あんなことを言わなければ、今頃は・・・）

